

プラトン『ゴルギアス』篇におけるカリクレスと不調和

宮崎 文典

序

プラトンの対話篇『ゴルギアス』におけるソクラテスとカリクレスの対話の冒頭において、ソクラテスはカリクレスのあり方について、次のような予告を行なっている。

「だから、ちょうど今言っていたことだが、不正を行ない、そして不正を行ないながら裁きを受けないのが、あらゆる害悪の中でも究極のものだというのはないのだといって、哲学を論駁してくれたまえ。あるいは、もし君がこのことを論駁されないままにするならば、エジプト人の神である犬に誓って、カリクレスは君と一致しないことになるだろう、カリクレス、むしろ君は生涯にわたって調子が合わないことになるだろう。しかしながら、最もすぐれた人よ、私としては、私のリュウヤや私が費用を負担することになる合唱隊の調子が合わず不協和であ

プラトン『ゴルギアス』篇におけるカリクレスと不調和

るとか、大多数の人々が私に同意せず、反対のことを言うことの方が、私が一人であっても、私が私自身と不調和であったり反対のことを言うことよりもよいと思っ**て**いるのだ。」(482

b2-c3)¹

ソクラテスがここで指摘しているのは、カリクレスが何らかの自己矛盾をはらんでいるということ、またその一方でソクラテスはそのような自己自身との不調和を望まないということである。カリクレスは「生涯にわたって (en hapanthi toi bio) 調子が合わないことになるだろう」、²という言葉からすれば、彼が抱える不調和はたんなる論理的不整合以上のもの、つまり「いかに生きるべきか」というレベルの問題であると考えられる。³

本稿では、カリクレスの抱える不調和というものがいかなるものであるかを考えることにしたい。そこで、以下ではまず、カリクレスの発言から彼がとっている立場について確認する。つづいて、ソクラテスの調和的立場について確認したうえで、カリクレスの不調

和がいかなる構造をもち、いかにして生じるものなのか、検討することにしたい。

I カリクレスの立場

さきの引用箇所直後には、カリクレスの長い発言(482c-486d)が続いている。この箇所はその内容からして、自然(*phusis*)における正義が主張される前半部(「自然の正義」説 482c4-484c3)と、哲学をやめるようソクラテスに勧告する後半部(484c4-486d1)に分けることができる。この前半部と後半部のあいだには、法律および大衆にたいする態度の違いがあり、この観点からカリクレスの立場のなかにずれを見出すことができるものと思われる。

前半部におけるカリクレスの主張の基本は、すぐれた者(*ho aretôn*)が劣った者(*ho cheiron*)よりも多く持つこと(*pleon ekhein*)が自然における正義であり、自然においては不正を行なうことよりも不正を受けることのほうが醜く、悪であるというものである(483a-e)。ここでカリクレスは、法律と大衆について次のように考えている。すなわち彼によれば、不正を受けることは、自分で自分を助けることができない奴隷のような者にこそふさわしい。そして、法律はこうした多数の弱者たちが自分たちの利益を守るために制定したものにすぎず、多く持つことを不正とする点で、自然に反するものである。ここにはっきりとあらわれているのは法律お

よび大衆にたいする軽蔑の態度であるといえる。カリクレスが理想とするのは、法律を踏みじり支配者となるであろう、充分な素質をもったすぐれた者である(484a-b)。

これにたいして、後半部においてカリクレスが価値を置いているのは、法律を否定することなく、その枠内で成功することであるといえるだろう。カリクレスはソクラテスに哲学をやめるよう勧めるが、それは「立派ですぐれた、名声をうたわれる(*kalon kagathon kai eudaimon*)」(484d1-2)者になるためであり、そのためにはポリスにおける法律(*hoi nomoi hoi kata ten polin*)に無経験であってはならない(484d2-3)。また彼によれば、見習うべきは「それら些細なことに關して論駁する人ではなく、よい暮らし(*bios*)や名声(*doxa*)、その他多くのよきものをもつ人」(486c8-d1)であり、理想はポリスの中央であるアゴラにおいて「自由に、大声で、存分に発言すること」(486e1-2)である。このように、後半部におけるカリクレスの主張は、名声の獲得や政治家あるいは弁論家としての活躍、つまりポリスの枠内での成功の追求である。そのため、ここには前半部にみられた法律や大衆にたいする蔑視はみられない。むしろ、ここにみられるのは、ポリスにおける法律を否定せず認められる立場であり、名声を追求し大衆に愛されようとする態度であるといえるだろう。

このように、カリクレスは前半部ではいわゆる「自然の正義」説にともなって法律を否定し大衆を蔑視する態度をとり、また「自然

の正義」説に見合う支配者の理想像を掲げながら、後半部ではポリスにおける成功を理想として掲げることによって、特に法律を否定し大衆を蔑視しない、前半部とは異なる立場をとっている。この、それぞれ異なる二つの立場に関連するカリクレスの主張をさらにみてみよう。

まず、快楽と欲望に関するカリクレスの見解には、「自然の正義」説に通じる大衆蔑視の態度がみられる。⁵⁰以降においてカリクレスは欲望の充足を快い生、幸福な生ととらえ(494b-c)、欲望を抑えず肥大化するに任せたいうで、勇氣と思慮でもってそれに奉仕するのが「自然における立派で正しいこと」(501e)であり徳であるとしている(491e-492a)。このような、欲望を充足させる能力をもった者が、「自然の正義」説において、劣った者より多く持つべきだとされる「すぐれた者」にあたる⁵¹一方で、多くの人々は欲望を満足させる能力のない者にとらえられるのである(492a-c)。

一方で、カリクレスはソクラテスから、民衆(demos)を愛する者と評されている(481d3-5)。

ソクラテスによれば、カリクレスは民衆を愛するがゆえ、民衆の主張や意向に反対し反論することができず、意見を変えてしまう(481d-482a)。民衆を愛する彼の態度は、民衆にたいする迎合(Kolakeia)につながる。彼はアテナイ人の給仕をし、喜ばせることをめざして付き合うという、迎合のやり方でポリスを世話するようソクラテスに勧めている(521a-b)。

プラトン『ゴルギアス』篇におけるカリクレスと不調和

以上をまとめると、次のようになるだろう。すなわち、カリクレスは二つの立場をとっている。一方は欲望充足の称揚や「自然の正義」説とともに法律を否定し大衆を蔑視する立場(以下P1とする)であり、もう一方は民衆を愛し、法律を否定せず、ポリスにおける成功を求める立場(以下P2とする)である。⁵²さて、P1とP2は互いに矛盾している。ここでたとえば、カリクレスが本当に求めているのはP1の理想の実現であり、政治的成功としてのP2をそのための手段と解釈するならば、カリクレスの立場がはらむ矛盾を解消することができるとは思えない。⁵³しかしソクラテスは、民衆に愛され権力を得るためには、民衆や自らが属す政治体制(politeia)に似たものとならなければならないと述べている(512e-513c)。これに従えば、P2の立場の実践は民衆や政治体制への類似あるいは同化に帰着することになるが、民衆に同化することはP1とは相容れないものである。したがってP2の実践を、P1を実現する手段とみなすことはできない。われわれはむしろ、カリクレスがP1とP2という相反する二つの立場(あるいは信念)を同時に保持していると考えべきだろう。カリクレスが抱える彼自身との不一致は、ここにあるものと思われる。

II ソクラテスの立場と調和

カリクレスの矛盾した立場にたいして、自己自身との不調和を望

まないというソクラテスの立場はいかなるものであろうか。「不正を受けることよりも、不正を行なうことのほうが醜く、悪い」、「不正を行なう者があれば、それが自分であれ身内や仲間であれ告発すべきである」、「弁論家は正しい人でなければならず、正しいことについての知識を持っていなければならない」、「不正を行なうのは、不正を受ける人よりも、不正を行なう本人にとって害悪である」など、ソクラテスは本対話篇のなかでさまざまな見解を表明している。彼が表明しているこれらさまざまな見解や態度が相互に調和しているとすれば、それはいかにしてか。

ここでは、カリクレスが議論を一時放棄したことによって、ソクラテス一人で議論が行なわれる505e以降の箇所注目したい。ソクラテスはここで、それまでの議論(503d-505b)の要約からはじめて、彼自身の見解を展開している。まず、快と善は同一ではなく、善のために快がなされなければならないということから始まり、秩序(*kosmos*)と善のつながりをもとに、節制を具えた魂(*he sophron psuche*)はよいものであるとされる(507a)。そして、放埒な魂は劣悪であること、また、節制を具えた人は正義、敬虔、勇気も備えた完全によい(すぐれた)人であること、そして、よい人は物事を立派に、よく行なうので幸福であるということが確認される(507a-c)。そしてこの確認をうけて、幸福になろうとする者は節制(と正義)を追求し放埒を避けるべきであるということが説かれる(507c-d)。そしてさらに、ソクラテスはこれをうけて、「不正を受

けることよりも、不正を行なうことのほうが醜く、悪い」、「不正を行なう者があれば、それが自分であれ身内や仲間であれ告発すべきである」など、それまでの議論のなかでソクラテスが主張してきたことが真実であることを再度主張している(508b-c)。

以上の議論は、ひとつの命題を前提として、演繹のかたちで展開されている。すなわち、まず、「節制を具えた魂はよい」(507a1-2)という命題をもとに、「節制を具えた魂がよいとすれば」(507a5)放埒な魂は劣悪であるとされる。そして、節制を具えた人は正義その他の徳も具えるということなど、つづけて展開された議論がすべて「真実であれば」(507c8)といって、幸福になろうとする者は節制を追求すべきであるという説が導出されるのである。さらに、「不正を受けることよりも、不正を行なうことのほうが醜く、悪い」をはじめとした諸々の主張は、幸福な人が幸福であるのは節制や正義の徳を持つことによってであるという説からくる「諸帰結(*sunbainonta*)」(508b3)であるとされている。また、ソクラテスが一連の演繹の出発点となっている「節制を具えた魂はよい」という命題を導き出したとき、「私としてはこれら以外に、他のことを言うことができない」(507a2)と述べていることからすると、この命題がソクラテスの根本的な見解(立場)となっていると考えられる。

つまりソクラテスの場合、諸々の見解あるいは態度は、すべてひとつの根本命題から引き出されたものであり、それらはすべて前提一

帰結の連鎖によって相互につながっているのである。ソクラテスは、自分は哲学を愛しており、自分の話していることは実は哲学が話していることであり、哲学はいつも同じことを話すのだ、としている(482a-b)。このことをあわせて考えるなら、ソクラテスは哲学によってひとつの根本的な見解(「節制を具えた魂はよい」)をえているのであり、そこからまた哲学によって諸々の見解を導き出しているのだといえるだろう。そして、あらゆる態度や見解を、哲学によってすべて同じひとつの命題から導き出しているからこそ、ソクラテスの立場には矛盾がなく、調和しているのだと考えることができるだろう。

III カリクレスにおける不調和の構造

ソクラテスの立場における調和の構造が以上のようなものであるなら、カリクレスが抱えている「 Γ と Δ 」の不調和は、どのような構造をもっているのだろうか。

ソクラテスは、「不正を行なうことは、不正を受ける人にとってよりも、不正を行なうその人にとって、より害悪であり、より醜い」ということが、「鉄と鋼の論理によって」(509a1-2) 押さえられ縛られているのだと述べたうえで、カリクレスにたいして次のようにつづけている。

「(…)これ〔鉄と鋼の論理〕を君か、あるいは君より威勢のいい誰かが解き放つのでなければ、私が今語っているのと別の仕方でも語ることによって、立派に語ることはできないのだ。というのも、私はいつも同じ議論をしているが、それらのことがどのようなものであるか私は知らないのだけれども、しかしながら今のように、私が出会った人たちのうちの誰一人、別の仕方でも語って笑い物にならないことができるからだ。」(509a2-b2) (一)内は引用者による補足)

ここでソクラテスが「私はいつも同じ議論をしている」と述べているのは、ソクラテスの語ることはつねに哲学によってえられた根本命題(「節制を具えた魂はよい」)からの帰結であり、それらはいずれも哲学によって導き出され、前提・帰結のあたりでつながっているからであると考えられるだろう。これにたいして、ソクラテスの議論とは別の仕方でも語った場合には、語った人はかならず笑い者になると言われている。これはどういう意味だろうか。今の場合、カリクレスの唱える説はソクラテスの見解と異なっている。この場合、カリクレスの議論にはどのような問題があるのだろうか。そして、それはどのようにして「笑い者」になるのだろうか。そこで、カリクレスの見解はどのようにして成りたっているのか、考えてみたい。ソクラテスが表明する見解は、すべて前提となる根本命題からの帰結として相互に連結しているのだと考えられるが、

これにたいして、カリクレスが抱える二つの相反する立場は、それぞれが別個のものとして独立しており、相互の関連をもたないからこそ不調和を招くことだろうか。

しかし、カリクレスの二つの立場には共通点がある。それは自分で自分を助けることができないことを醜いとする態度である。P1の立場は大衆を蔑視するものだが (483b5-6 「弱い人間たち、すなわち多くの人間たち (*hoi asthenais anthropoi... kai hoi polloi*)」) 、それは大衆のことを「奴隷のようなもの」(483b2) 、すなわち「不正を受け侮辱を受けても、自分で自分を助けることも、自分が世話している他者を助けることもできない」(483b3-4) 者ととらえているからである。一方P2の立場も、自分で自分を助けることができず、自分自身も他の誰一人も最大の危険から救い出すことができないような者にたいしては、「横っ面を引っ叩いてやっても、罰を受けずに許される」(486c3) としている。カリクレスが言うところの「自分で自分を助けること」とは、具体的には財産を奪われること (486c) や死刑にされること (486d) 、こうしたことを被らないようにすることである。言い換えれば、それは、自分を死の危険から救って出来るだけ長く生き、かつ自分の財産を安全に守ることである (cf. 511b, 512d)。そして、P1もP2も、じつはともにこの意味で「自分で自分を助けるべきである」という、自己防衛あるいは自己保存の信念を基礎にしていると考えることが出来る。

カリクレスは自然の正義を説くなかで、弱者の所有物はすべて強

者の所有に帰するというのが自然の正義であるとして、ゲリュオネスの所有する牛を強奪したというヘラクレスの所業を自然の正義によるものとしてとらえようとしている (504b⁹)。ここに顕著なように、P1における「不正を受けること」は、おもに所有物を奪われることをさしているといえる。不正を受けることが不正を行なうこと以上に醜いこととされるのは、それが自分の所有物を救い、守ることができないということであり、自分で自分を助けるべきであるという自己防衛原則に反するものだからである。そしてまた、この自己防衛原則が基準となつて、自分で自分を助けることができない大多数の弱者、それにたいする少数の強者という区別が生じ、これが大衆にたいする蔑視につながるのだと考えられる。この意味で、P2の大衆蔑視は「自分で自分を助けるべきである」という信念に基づいているといえよう。

P2の場合も、自己防衛の信念がその根底に横たわっているといえる。P2はポリスにおける成功を理想とするものであり、それは名声を求め大衆に愛されようとするために、大衆への迎合に帰着するものであった。カリクレスは民衆にたいして給仕あるいは迎合のやり方で接するようソクラテスに勧めているが、それは、迎合するのでなければ、誰かがその気になればソクラテスの財産を奪ったり、死刑にしたりするかもしれないという理由からである (521a⁶)。この場合、カリクレスは迎合を自己保存のための手段としてとらえていると解釈することが出来るだろう。

このように、P₁における大衆蔑視の態度も、P₂における大衆への迎合の態度も、ともに「自分で自分を助けるべきである」という信念に基づくものであると言ふことができる。さらに言うならば、この場合P₁もP₂も、ともにこの信念を根本命題として、そこから生じた帰結としてとらえることができるだろう。

また、欲望の充足に価値を置く態度（あるいは、放埒を幸福とする立場）も、P₁だけでなく、P₂にも当てはまるものであるといえる。じつさい、カリクレスは自己自身の欲望を充足させることだけでなく、他者の欲望を充足させることもまた徳であると考えているといえる。⁽¹²⁾ P₂における大衆にたいする給仕・迎合という態度は、最善をめざすことなく、ただ他者の快樂、つまり他者の欲望の充足をめざすものであり、迎合の態度の基礎には、欲望充足に価値を置く態度があるといえる。したがってこの場合も、欲望充足に価値を置くことが根本的な信念としてあるのであって、大衆を蔑視するP₁の立場も、大衆に給仕・迎合する政治家としてのP₂の立場も、ともにそこからの帰結としてあらわれているとみることができただろう。

このように、カリクレスの立場P₁とP₂は、それぞれが別個のものとして独立しているわけではなく、じつは両者はともに共通の前提から生じた帰結としてあらわれているものと思われる。しかし、P₁とP₂は互いに矛盾する立場である。ここに、ソクラテスの立場との違いがあるのであり、重要な問題があるといえる。すなわち、

プラトン『ゴルギアス』篇におけるカリクレスと不調和

ソクラテスの場合、哲学によってえられた根本前提から導き出された諸々の見解や態度は相互に連結し、矛盾のない調和をなしているのにたいし、カリクレスの場合、共通の前提からP₁、P₂という相矛盾した帰結が同時に生じているということである。これが、カリクレスが抱える不調和の構造であるといえよう。

ソクラテスは、彼の議論の仕方とは別の仕方でも議論すれば、その人は必ず笑い物になるとしていた。カリクレスの立場の構造が以上のようなものであるならば、ソクラテスの議論とは異なる議論の仕方とは、カリクレスにみられるような、哲学とは異なる信念を前提に据えることによって何らかの立場を形成し、諸々の見解や態度を表明することであると思われる。そして、このような立場がソクラテスの吟味にかかることによって、その立場をとる当の本人がその立場を放棄せざるをえないような恥ずべき帰結にいたる——すなわち、その立場が笑い物になる、ということだろう。その実例と考えられるのが、よい快樂と悪い快樂を区別することなく、ただ端的に喜びを感じている者が幸福な者であるとする立場が、男娼(*rainados*)の生に帰結するという議論(494c-495a)である。快適に生きることとは、欲望を充たして喜びを感じながら幸福に生きることであるというカリクレスの発言をうけて、ソクラテスは、そのようにして欲望さえ充たせれば、男娼の生も幸福と言えるのかと問う。この問いかけにたいして、カリクレスは恥の感情のせいでこれを肯定できない。欲望充足に価値を置いているのはP₁、P₂とも共

通のことであるし、法律を否定し、ただ端的に欲望充足を幸福とする⁽¹⁾ならば(躊躇せず)これを肯定できるはずである。しかしカリクレスがそれを肯定できないのは、それが政治家として名声を求め民衆に愛されることを求める⁽²⁾の立場にとつては恥ずべき帰結であるからである。⁽³⁾ソクラテスはこの論駁によって、カリクレスが抱える二つの見解(立場)相互の矛盾を明るみに出したのである。

むすび

以上のように、根本的な信念(「自分で自分を助けるべきである」という自己防衛・自己保存の原則と、欲望の充足に価値を置く態度)からの帰結としての二つの立場⁽¹⁾と⁽²⁾が、ともに同じ前提から生じたものであるにもかかわらず、相互に矛盾する——カリクレスが抱える不調和なあり方は、このような構造をもっていると考えることができるだろう。そしてソクラテスは、カリクレスが抱えるこのような不調和を見抜いたうえで、論駁によってそれを明るみに出したのだと言ふことができるだろう。

ソクラテスはどんな時も最善をめざして語るのであり、その意味で彼は自分のことを、現代のアテナイ人のなかでただ一人真の政治術に着手し政治を実践する者であるとしている(501D)。また、彼によれば政治(ポリスの事柄)に向かう者が配慮すべきは、市民ができるだけすぐれた(よい)者になることである(515B-C)。した

がって、ソクラテスはずねに論駁(エレノコス)を通して相手をできるだけすぐれた者にすることをめざしているということになる。⁽¹⁾それでは、カリクレスとの対話を通して、ソクラテスは彼の魂をよくすることができたのかといえば、どうだろうか。一度は対話を放棄し、また最後まで迎合の生を択ぼうとするカリクレスの姿を考えると、ソクラテスが十分な効果をあげられたとは考えづらい。しかし、論駁(エレノコス)の機能や手続き、あるいはその効果といった問題の検討については、稿を改めて論じることになしたい。

注

(1) 以下「ギリシア語テキスト」はE.R.Dodds, *Plato, Gorgias*, Oxford, 1959を用い、J.Burnet (ed.), *Platonis Opera*, vol.3, Oxford, 1903を併せて参照した。箇所指定はステファヌス版頁・行数にしたがう。なお、訳文は加来彰俊(訳)、『プラトン全集9「ゴルギアス」』、岩波書店、一九七四を参考にして、筆者が訳したものである。

(2) Dodds, 1959, p.260も、「生涯にわたって」という言葉から、プラトンはカリクレスの抱える不調和について理論上の不一致 (theoretical inconsistency) 以上のものを考えているととらえている。

(3) ソクラテスは、カリクレスとの対話の主題が「人はどのようであるべきか」(487E9)、「いかなる仕方であるべきか」(500B7)であることを強調している。

(4) 正しく生きようとするものは欲望に「奉仕するのに充分である」(nikanon einai) (492a1) 者だが、このことは「多くの人々には可能でない」(ou dunaton) (492a3) という説明や、また「自分たち自身の無能力を (ten hauton adunamian) 隠して」(492a4-5) という表現など、カリクレスは欲望の充足をひとつの能力としてとらえている。

(5) カリクレスは483e4-484a2において、われわれ(大衆)はすぐれた者にたいして、平等に持つのが正義であると語り聞かせて、彼を奴隷にするのだと語っているが、492a5-7ではこれをうけて、大衆は「放埒は醜いものである」と主張して、ちゅうど先ほどの話のなかで私が言っていたように、素質においてよりよい人間を奴隷にする」(傍点引用者)と述べている。このことから、この言われている、欲望を肥大化させ充足させる能力のある者を482c-484cにおける「すぐれた者」に該当するものが分かる。

(6) カリクレスの立場にまつこの二区分は、基本的にはC. H. Kahn, 'Drama and Dialectic in Plato's *Gorgias*', *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 1, 1983, pp. 75-121 at 100 & R. Woolf, 'Callides and Socrates: psychic (dis)harmony in the *Gorgias*', *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 18, 2000, pp. 1-40 at 2-6に定むべきである。Kahn, 'T. Irwin, *Plato, Gorgias*, Oxford, 1979, p. 179を参照。

(7) Kahn, 1983, p. 98には大衆への迎合を快樂獲得(上記P1にあたる)のための手段としており、Woolf, 2000, p. 4 n. 6はこれに反論しているが、その根拠は「顔面どおり受け取るならば(Taken at face value)カリクレスの発言全体は(…)二つの別個の理想の表現である」というものである。

(8) この一節とついで、490eでも、ソクラテスは同じことを話すと言われており、これらはそれぞれ「哲学者は同じ回話者である」(482a7-b1)とこの言葉に対応している。

(9) カリクレスは、ソクラテスの所業をこのように「自然の正義」説の文脈で解釈することの証拠として、ピントロスの詩の一節(484b4-9「法(nomos)は、死すべきもの、不死なるもの、すべてのもの王である。(…)それは最もひどいことをもたらしながら、至高の腕でそれを正義とする。私はソクラテスの所業をその証拠にそう判断する、なぜならば…無償で…」)を引いている。しかし、この詩における「法」がカリクレスの解釈の通り「自然の法」(483e3)を意味するものか否かにまつては、Dodds, 1959, p.

プラトン『ゴルギアス』篇におけるカリクレスと不調和

270を参照。

(10) 不正を受けるということは自分で自分を助けることができない、奴隷のようなものに属することであるとされる(483b)のは、このためであるといえるだろう。

(11) 他人や他人の持ち物に不正を行なうのは、不正を受ける人にとってよりも不正を行なうその人にとって害悪であるということ(508c-e)や生命に愛着を持つべきでないこと(512e)をソクラテスから説得されているにもかかわらず、カリクレスはソクラテスにたいして、死刑にされるかもしれない、財産を奪われるかもしれない、という忠告を再三繰り返している(486a-c, 511a-c, 521b-c)。このことからすれば、自己保存あるいは自己防衛の原則はカリクレスにとって、決して簡単には揺るぐことのない、根本的な信念であることと考えることができる。

(12) このことはカリクレス自身の発言(491e-492c)にははっきりとあらわれてはいない。しかし、ソクラテスが彼の発言を要約して「君が先に言っていたところの徳、すなわち自らの欲望と他の人々の欲望を充足させることが、真実のものであるならばね、カリクレス」(503c4-d)と述べたのにたいして、カリクレスはこれを否定していない。このことから、カリクレスは他者の欲望を充足させることにも価値を認めていることと推測することができる。この点にまつては、R. Kantelak, 'The Profession of Friendship: Callides, Democratic Politics, and Rhetorical Education in Plato's *Gorgias*', *Ancient Philosophy* 25, 2005, pp. 319-339 at 324-325を参照。

(13) 欲望の充足あるいは放埒よりも、快と善を同一視する見解(494c)のほうに、カリクレスの信念体系のうちの、より基層に位置していると考えることもできるかもしれない。しかし、カリクレスは結局快と善を同一視せず、よい快樂と悪い快樂を区別すべきことを認めている(493b)。一方でカリクレスは、抑制されることのほうが放埒(akolasia)よりも魂にとつてよいというソクラテスの主張にたいして議論を放棄しており、ソクラテ

「それはこれにたいし「この男は(…)抑制されることに耐えられないのだ」(598p)と評している。このことからして、放埒、あるいは欲望充足に価値を置くことのほうが、カリクレスにとってより基層に位置する信念であるように思われる。

(14) この点については、特に Woolf, 2000, p.8を参照。

(15) Woolf, 2000, p.24が規定しているように、ソクラテスの論駁には、対話相手のあり方を診断し、アポリアをつくりだす機能と、対話相手をはらむ矛盾を解決し、矛盾のない、一貫性のある信念を打ち立てる機能の二つがあると考えられる。